



Title	＜翻刻＞入江昌喜 久保之取蛇尾 後篇 上
Author(s)	
Citation	語文. 1956, 17, p. 31-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68499
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

久保之取蛇尾

後篇

上

久保之取蛇尾

俚諺雅証目錄

へぐへつる

一粒万倍

むないた

けち

丸寝

夜目

あふら火

集会するを汁といふ

竹輿をたてる

雲をはかり

見落す書落す

いひちらす

ゑがほ

けいふし

とはすがたり

初生の子首がすわつたと云

おちつき所

捨るをふてるといふ

そなへる

えりくづ

銭つなぐさし

らしもなきの字

人をかどはす

いらつく

ばぐちのどう

風の吹付るやうに

小袖をふくたい

歩ムをあよぶ

手づゝ

湯をかへらかす

帯紐とく

べかかう

ふくろ口

あせみづになる

心中

身がはり

なき人の衣服を袈裟に縫ひ僧に施す

あたこ山の櫓

芝の字

ぎよ葉牡丹

衣キヌのよるといふ

人を呼ふに手をたゝく

嗽クハスをうがひといふ

蜘蛛かくなは十文字

たらす

味よきをいしいと云

酒をサゝと云

女子の詞にもじといふ井酒を九こん

田楽豆腐并雑焼

餅をかちん

未醬をむし

米を菩薩并さゝじん

酒ばやし

酒造る者をとうじ

だんごへそさゝもち花ぼろ

妻ををんなども

ひけらかす

赤土ハネがあがる

はねぎる

物を食ふをツムといふ

刈しほ

かみなり

つゞら

上ミ機は古制并さいがき

苦手

一尋^{トビロ}

糞器をヲカワといひマルと云并便通の古語

しびん并小便

せんずりの古語并しゝ

しこだめる

うたて

自の事をおれと云

よごす

夜あかし

証文を手形といふ同

僧に和訓なし并尼^{ゾウ}同

京都嶋原^同

男女の中をせくと云

帯にや短し手^テ纏^{ヒキ}にや長し

風のつて

かひといふ詞

つゞはたち

かます

矢立^テ

広蓋^{ヒロフタ}

盗人をとらへて見れば

盗人をとらへて見れば

盗人をとらへて見れば

しこる

うかめて居る

曇るをしけると云

目さまし草

牛王信景説

飯をめしといふ同

金剛草履^同

京錦小路

ゆひを折を手を折といふ

てんこつにあはぬ

見る空がせぬ

ひたとゝ言詞

小児の額に犬ノ字を書

ま子

自の事をわしと云

門^{カド}たてる

誰がタニと云詞

男女の中くさりあふ

舟に名を付る

つないで置と云詞

やさしき人

時鳥を寝ながら聞^ミを忌む

噫^イ

子を失ひしをいなせしと云

ふつとゝ云字

野徑を繩手と云

もてはやすと云

そやす

答にエ、エイと云

たはこと

何所^{イッソ}をさして

犬をけしかくると云

封をシメと云

汗かく

よそといふ字

父をテ、と云

雨がしよぼく降と云

はかりの始

そばへる

伊勢のおしら石

五月よめとりを忌む

風のたより

おもはしきノ字

清淨に塩水を用

影の膳

わやく者

久保之取蛇尾

今俗にヘグといひヘツルといふも古語なり共に折ノ字をよめり欽明紀云拔_ニ取新羅_所折之_国云々

○俗一粒万倍といふも新猿楽記云春以_ニ一粒_一雖_レ散_ニ地面_ニ秋以_ニ万倍_一納_ム藏内_ニ云々

○俗に胸をムナイタといふは誤なりムナサカといふへし古事記云天雅彦之高胸板_一云々自注_ニ多歌武娜婆歌_ナとあり此胸坂ノ坂ノ字を板と見誤りしよりムナイタとはいひ伝へしなるへし万葉集第十一にをばた_一の板田の橋のこほれなはとあるを契沖師説に板田の橋は坂田の橋_{大和国高市郡}の誤りなりといはれしも坂ヲ板とあやまりたり

○俚俗にあしき事の前兆あるをケチがあるなどいふも古語なり旧本今昔物語語卷廿三鳳至ノ孫ノ語ニ此ケチハアリケルナリといへり怪_ナと書り

○丸寝といふことば 万葉第廿

へ草枕旅ゆくせなのまるねせはいはなる我はひもとかもねん

○夜目 万葉第十

へ鶯の春に成らし春日山霞たな引夜目に見れとも

○あふら火 万葉第十八

へあふら火の光に見ゆるわかかつらさゆりの花のあまはしきかも

○俗集会する事を汁と云或何中間の汁なといへりむかし世に汁講といふ事有客を請する時其客銘ノ_{西山}に飯をめんつうといふ物に入携来り亭主は汁一色のみをこしらへ其汁を鍋のまゝ座敷へ持出打寄賞翫し興に入しとなり遺事_{西山}汁の名は此遺風な

るへし

○竹輿^{カサ}をかきすゆるを立^タといふも古語也万葉第三^{休所ヲ立場トモ云}八葉^{五十}和豆^{ツツカ}香山^{イミ}御興立^{ミキタテ}之而——此みこし立^タしてとよめるも輿をかきすゆる也といへり

○そことなく遙に行事を雲をはかりにといふも西行集に

「よしの山雲をはかりに尋入て心にかけし花を見る哉

○物の漏^したるを落るといふたとへは見落^ス書落^キいひ落^ヌなどいへるも古遺也古事記上ウチミルシマノサキ／＼カキミルシマノイソノサキオチズ云々又万葉第九淵瀬も不落^レさでさしてとよめり是皆もらさずなり

○はしたなく物いふをいひちらすといふも狭衣にさるにてもあしかるへき事かはといひちらしてたちぬと云々又書ちらすといふは散木集に秋の田のほくとも雁の見ゆる哉誰大空に書ちらすらん

○俗に笑^{エム}顔をゑかほといひてム文字を略していふも狭衣云めのとも心ゆきてゑわらひなすると云々是多み笑といふへきをミ文字を略せり是等の例成へし

○俗にけい／＼しういふも古語の転なり源氏未通女の巻にあたりちかくだによせずいとけ／＼しうもてなしたり云々此け／＼しうの転語成へし

○俚諺にとはずがたりといふも曾丹集冬の歌の序に人のそしりもしらずしてとはすがたりをあつめたるなり云々上下略

○初生の子百日はかりの後首のかたまりたるを今俗首がすはつたといふは首がゐたといふへき也古語にはしかいへりうつは物語国譲下巻云宮は首いとよくゐてをきかへりし給云々但し首がゐたと云とすはつたと云と同義和名十一綾^{子紅ノ反俗ニ云為流}

船著^デレ沙^{ニル}不行^カ也云々定頼卿集連歌に船はるれとも波はたちけりとあり此船のキルをも今俗にはスハツタといへり人の起居ノ居をゐるともすはるともいふがことし

○人の他所へ行てとゞまる所をおちつき所といふも阿仏のうたゝねに云のどかなる水海の落いたるけちめにはる／＼と生

ひとつきたる松のこたちなと絵にかゝまほしうそ見ゆるおちつき所のさまを見ればこゝかしこにすこしおろかなる家居ともの中にはと云々

○俗に捨るをふてるといふも雅語也大和物がたりにかなまりの水あつゆにたぎりぬれば湯をふてつ又水を入ると云々

○神仏に物奉るをそなへるといふも万葉第十

へ梅の花したり柳ををりませて花にそなへは君にあはんかも

○えりくづといふ詞も近俗ならずうつは菊の宴に大将のおとどつたなきが中にもえりくづなるが待ると云々

○錢をつなぐ物をさしと云は稲藁にて作る故也稲をさしといふ田舎にて青稻アヲサシといへり凡河内躬恒所撰中臣盧日損ルニ天功ル

者櫛稻訓クシノサシ久志左之云々 又撰津国風土記河辺郡籾稻村云々創撰辨説

○俚語にらつしもなきといふは物の次第なき事也無藤次と書下学集に藤次は次第ノ義也云々

○人あき人の人をさそひ行をかどはすといふも後撰集に

山風の花の香かとふ麓には春の霞そはたしなりける

余材抄に花の香かとふといふは香をぬすむ心なり云々かとはすの俗語こゝに出る歟

○魚鯁イサノモノの咽にたち或は手足に草木の刺ヘリなとたちたるを俗イラツクといふ和名鈔云玉篇云苛小草生ノモノ刺也和名と有しかれば

古俗刺をイラといひし歟今いふイラツク此遺語成へし

○賭博者の魁ヘリを下ウといひ又オヤといふもいにしへよりしかいへり新猿樂記云大君ノモノ夫者高名博打也筒父トクノモノ擢トクノモノ傍鑿目任ノモノ意云々

今按に博奕筒とは頭なるへき歟称筒者其採トツテ鑿投者也鑿を頭子といへは其頭子を採故に頭と云なるへし和名鈔云雙六采

楊氏漢語抄云頭子見雜題双六詩云々 万葉第十六詠雙六頭ノモノ歌云々

○人の富貴になるを風の吹つくるやうによくなるなといふも古き諺なり宇治拾遺第七云いね多くかり置てそれよりうちはしめ風の吹つくるやうに徳つきていみしきとく人にてぞ有けるといへり

○今俗小袖をふくたいといふも同第八巻に云いかに寒くておはしつらむこれをきせ奉らんとてたりつる物なりとてひき出たるを見ればふくたいといふものをと云々

○あゆむをあよびといへば片言なりと思ふは却而非なり同第九巻に云錚あら／＼といひてふしまろぶ鬼はあよびて帰りぬ云々 又皇極紀歌曰野麻騰能也 和 飢斯能毗稜栖鳴忍広瀬 倭艳羅務騰也 阿庸比歩也

○女の物なとえ縫はぬをてづといふは久安五年右衛門督家歌合判者顯輔卿判詞云左歌へ道しりたらばといへるほとこそくちづに聞ゆれと云々此口づに對して手つとはいふ成へし宇治拾遺第十四巻云人／＼わらひぬへからん物かたりし給へ笑て目をさまさんといひければ入道おのれは口てづにて人のわらひ給はん物かたりはえし侍らし云々 新猿蓑記織粧裁縫甚以手筒也

○人の物かたりするにたすけこたふるをあどうつといふも大鏡第一巻云さるゆらひそよく聞んとあどうつめりしと云々

○同書第五巻に花山院の御絵あそはしたるがけうある事をいへるにたかなのかはををこのおよびごとに入てめかかうしてちごをおどせばかほあかめてゆしうおぢたるかた書給へると云々 笥の皮を指にさし鬼形の爪なんのとことくしてたはむるゝ事今もする事也めかかうしてとは今俗にべかかうするといふ戯なりめかかうしては目あかうして也 通ス 今へかかうといふもへトめ通していへるなるへしおよびごとにあるを太指とは心得へからすたゞ指毎にさしてなり和名鈔に指和名由比 俗云於与比 とあり惣て指をおよびといふへし 擗於与比 太指也云々

○安心する事を帯紐ときてなどいふ俗語も同第七巻云かばかり安穩泰平なる時にはあひなんやとおもふは翁らがいやしきやどりも帯ひもときてといへり

○常はさのみ言おほからぬ人のふと物かたりなといづればはてしなく物いふを俗ふくろ口といふも同巻にうれしくもた いめんしたるかなとし頃のふくろの口あけほころひたち侍ることも云々

○汗のつよく出るをあせみづになるといふも同巻にかははけさうしたりつれども草のはの色のやうにて又あかくなりなど

さま／＼のやうにあせみづになりてと云々

○をとこ、をみなの、みそかごとして、たゞならず、ふくらかになり、さらでも、おやはらからの、おもはぬかたに、よすがもとめいひよるを、うしと思ひ、あるは、かぞいろはの、ゆるさぬ中をかなしひ、君につかふまつるものは、たのみし主のいかりをおそれなんど、我中川のよどみがちなるを歎き、かたみにいひあはせつゝ、ともにふかき淵にもしづみ、又は刃にふしなんどして死するを、俗心中といふ、或翁のいはく、かゝる事は、ふるくは聞えざりしを、今はもゝとせにもちかゝらん歟、ならの京に、舊氏なるをのこ有けり、難波のあそひ、三勝とかいふものに、ふかく契りしが、いかなるさはりかありけむ、いひあはせつゝ思ひ出、ともに刃にふしてむなしくなりぬ、これやはしめならん、しかありしよりのち、世にかゝる事きこえそめて、ちかき頃は、こゝかしこに、何かしそれかしなんと、あはれなる事とも、とし／＼に多く聞ゆる事になんりぬと云々今おもふに、さる事猶いにしへにもありけり、芳野拾遺云、里見主税のすけがもとに、いみしき若党ありけり、其頃内侍のめのわらは、此男を見そめて、あなたよりしたしみより、文やうの物したゝめ、人してひそかにかのもとへつかはしけるに、心ときめきて、さそふ水あらはとよめる、むかしの歌もあり、まして女のおこかれとおこせしむねを、いかでそむき侍らんとて、返事したゝめおくりければ、女もいとうれしくて、かしこうぞもらし給ふなとて宵月のくらきほとに、内侍のうちをしるのび、其もとへまかてつゝ、浅からすとし頃の思ひともいひはたし、更行夜半の鳥かねも、耳に入らて、夜もやうやく、ひかしの山より明かたちかく成侍れば、いさ帰りなん、又もいとまをうかゞひてこそとてかへり侍しが、其後かの女、心ばへそゞろになりて、内侍へのつとめも身にそまず、おもひくらしつるまゝに人／＼にもさとられ、さがなくそしりをまうけ、内侍にもきこしめして、時こそあらめ、此頃はものゝふのいそかはしきに、うへにも御こゝろうくわたらせ給ふ折から、いとにくき事なり、女のかたより恋わびたる事は、ためしもあるへけれど、めしつかふによしなして、追はなち給ふ、女わらはもすべきやうなくて、男のかたへ行て、かくといひつゝ、ひと目ふつかこそかくしもしてん、さわかしき折から、かゝるふるまひの主人へ聞え侍らは、行末とてもあしかるへし、又

たのみよるへきかたも侍らず、時うつらば、人もあざけりなん、此世こそつたなからめ、後の世は久しうなといひて、よひのほどにしのひ出、木ぶかき山かけに入てもろともによいばにふして果にけり、いとかなしきありさまで、人こそぞりてあはれかりしと云々是今所謂心中なるへし

○人の臣として、忠なる心あるものは、君のために一たび命をかくして、名を千載のうちににおくする事、古今に少からず、命にかはりて死をいさぎよくするものを、俗身かはりといふ、而此事の古をいふ時は、かならず藤原仲光か子幸寿丸、源美女丸の命にかはりし事をもて常談とす、しかれとも、さる事の古く物に見えたるは、応神天皇九年夏四月、遣^{シテ}武内宿禰^ニ於筑紫^ニ以監^ニ察百姓^ニ時^ニ有^リ讒者^ニ宿禰反^ス帝乃遣^{シテ}使殺^シ之宿禰之臣、若岐直真根子、獨傷^ニ宿禰無^レ罪而死^ニ便語^ニ宿禰云君無^ニ黒心^ニ天下所^ニ共知^ニ願密避^レ之、以謀^ニ於後^ニ人常云^ニ僕形似^ニ君^ニ幸我代^ニ君^ニ即伏^ニ劍死^ニ云々是今俗所謂身かはりの始なるへし猶詳なる事は、日本紀第十卷にあり往而見^ウつは物語国讓卷に我子の身がはりに我こそしなめと、ふしまるひ給ふといへり、又神功紀質ノ字、ムカハリと訓、一本に質と点、通音敷、是は今いふ人質をいへり

○今の俗、なき人の衣服を袈裟なとに縫て僧に施す事も、古きためし也、持統紀云、請^ニ集^ニ三百龍象大德等^ニ於飛鳥寺^ニ奉^ニ施^ニ袈裟^ニ人別^ニ一領^ニ曰^ニ此以^ニ天淳中原瀛真人天皇御衣^ニ所^ニ縫作^ニ也云々

○愛宕山にまうする人、櫓をもとめ帰る事、神祇拾遺云古城北鎮座時、毎年十一月鎮火ノ事有テ諸人詣奉、彼日青櫓ヲ截四方ニ立開フヲ、当役有縁ノ族、申下テ頂戴セシヲ法師ノ沙汰シ奉砌ニ及テ木ノ似タルヲ以櫓ニ取替、神ヲ罔シ奉云々当社ハ久代平安城北ノ鷹峯ノ東隣也、光仁帝ノ御宇、天応元年釈慶俊今ノ靈地ヲ開遷奉也仍神役仕奉スル禰宜、今北山ノ麓ニ居、祭奠ノ日ノミ供奉云々今按に、曾丹集に「あたこ山櫓か原に雪つもり花摘人の跡たにもなしとよめりあたこ山に櫓をとる事も久しく聞ゆるなるへし

○世俗しばといふ草に芝ノ字を用るは誤りをつたへ来れるにや和名鈔云萊草^{上音来和}一名類草云々是なるへし孟子離婁上云辟^{ヒラキ}艸^ヲ萊^ヲ任^ニ土地^ニ芝は字書章移切音支瑞草王者仁則芝草生云々本草云芝有^ニ青赤黃白黒紫六色^ニ又水芝荷也土芝芋也云々

○衣服の紋にキヨヤウ牡丹といふ物あり、それは牡丹の葉、両方より抱たるがごとく、中に蔵を画り、是をギョヤウ牡丹といふ事如何、或人云行ノ古篆、忬如此、紋に所画の牡丹の葉、此字形に似たり、されば行樣牡丹といふなり云々

○衣の破ぬへきほとなるを、ヨルとも、ナミヨルともいふは、和名鈔繪布類漢語鈔云マヨ云紙漢語鈔云マヨ欲ナミ壤也とあり、ナミヨルは並紙なり、古今集に「蟬の羽のひとへにうすき夏衣なればよりなん物にやはあらぬ」

○人をよふに手をたゝく事も古きならはし也、うつほ物がたりに、かばかりのことを、手たゝきてよひ奉らんなどいふと云々、源氏夕かほの巻に人をおこして、しそくさしてまゐれといへとの給へば、いかてまからん、くらうてといへばあなわかゝしとうちわらひ給て、手たゝき給へば山彦のこたふる声いとうとまし云々

○俗に嗽クサスをうかひといふも、ふるくよりいへり水鏡允恭天皇の股に水をとりにて御うかひ奉りしついでに云々うかひはくゝみて吐ハク出せは鵜飼のわさに似たれはいふなるへし平家物語に兵衛佐急き馬より下りて甲を脱手水鵜飼をしてと書るにも其意を知るへし

○劍術の手に、蜘蛛かくなは十文字といへる此かくなはとは古今集長歌に「かくなはに、おもひみたれて、ふる雪の」上下略

顯注云かくなはとはからくたものゝ中に、とかくちかへたる物のすき垣などのやうにみたれつくりたるあふら物也云々此くた物の形チのこことく切結ふをいふ成へし、いにしへはこのくた物をうち乱たることのたとへにはいへるにこそ、彼長歌にも、かくなはに思ひみだれてとよみ、奥儀抄に喜撰式の歌とて出たるにも、かくなはに、おもひみたれて、なきなけきなど見えたりさればこそ、打物の手にも入乱たゝかふ時などの事を、かくいふと知られたり和名鈔、飯餅類云、結果形如ニ結緒ニ和名加久之阿和云々是なり、此ノアを反せは、ナとなるゆへにかくなはといふ契神説

○今俗偽ルをだますといひ、或はたらすといふダマスはタラ古俗もかくいへると見えたり、太平記第十四卷云今度の合戦におゐて、忠あらん者には、不日に恩賞行るへしといひし壁書を決断所におされたり、是を見て、其こと書の奥に、例の落書をぞしたりける

へかくはかりたらさせ給ふりんけんのあせのことくになとなかるらむ

○又食の味よきをいしいと云も同廿三巻云頼遠をば侍所細川陸奥守顯氏に渡されて、六条川原にて首をはねられけり、其弟周濟房とて有をも、すてに切らるへしと評定ありけるが、其時の人数にてはなかりけるよし証拠分明にて、死罪をゆるし、やがて本国へそ下りける、夢窓和尚の武家に出て、さりととも口入し給し事叶さりしを、欺てもものやしたりけむ、狂歌一首、天龍寺の壁にぞ書付ける

いしかりし時は夢窓にくらはれて周濟はかりそ皿に残れる

此いしいといふ詞今昔物語にも有しと覺ゆるを今は其所をわすれぬ

○兒女のことばに酒をサ、といふは、もろこしに酒の異名を竹葉ともいふ故と、おもへるは非がことなるへし、サ、とは、我朝の古語にして太古よりしかいへり神功皇后御歌此酒コノミキハ、ワカミキナラス、クシノカミ、トコヨニ吾酒ニキマス爾非イハタ、ス、スクナミカミ少御神ノ、カムホキホキクルホシ、トヨホキ、ホキモトホシ、マツリコシ、ミキソ、アカスラセ、サ、豊壽、壽、壽、壽、奉、來、酒、不飽放、酒、

○又女子の詞にもじといふ事を、物の下に付ていふ、たとへば、帯をおもじ鮮をすもじ、なといふも、近俗ならず讃岐典侍日記云かなしくて袖を顔におしあつるをあやしげに御覧ずれば、心得させまゐらせじと、さりげなくもてなしつゝ、あくひのせられて、かく目に涙のうきたると申せば、みな知りさふらふと仰らるゝに、哀にかたじけなくおはえさせ給へば、いかに知らせ給へるぞと申せば、ほもじのみもじの事を、思ひ出たるなめりと、仰らるゝは、堀川院の御事とよく心得させ給へると思ふも、うつくしう云々大永六年、宗長日記云、めしつかふ者油断して雑事錢などとられて、事かくるまゝに、こしもとの不辦をいへば、雑事錢こよひぬもじにともじせらるゝと云々海土藻芥云、内裏仙洞には、万の食物に異名を付て被召事也飯ヲハ、供御、酒ハ、九献、餅は、カチン、味噌はムシ、塩はシロモノ、豆腐はカヘ、素麵はホソモノ、松茸をマツ、鯉は、コモシ、鮒は、フモシ、鵜は、ツモシ、土筆は、ツク、蕨はワラ、葱は、ウツホ、と云々又云、マナ初メ、袴着、元服、移徒以下ノ酒肴ハ、必三献ト云々、而後光嚴院、御愛酒ニテ御座アツキケル程ニ、其御代ヨリ、献数加増シテ、或

ハ五献七献九献被聞召タリ、依、近頃ハ、酒ヲ、九献トハ申合ケル云々

○田楽豆腐は、一書云、南都御祭礼の時、田楽法師といふもの、白ねりをかぶり、竹杖二本つき、其杖を足にして行が、豆腐を串にさしたるに似たり、故に豆腐を焼に串、二本さしたるを、田楽といふと云々、さる事も有へし、又田楽法師等が仕出し料理にて、田楽豆腐といふにても有へし、しかるを、近俗、豆腐の田楽といふは、語を転し誤る也、宗長の日記にも、房州夜^{庵原安房守}に入て来臨雪よりつもるかたみのことは夜も更爐辺にひさをならへ、田楽豆腐の盃たびかさなりて、旅宿に帰られきと云々田楽豆腐といふへし、又雉子焼といふも南都御祭礼に氏子、又は立願の者より、雉子を奉るを、廻廊にかけ置、祭はてゝ其雉子を、社人にやきていたゝかす也、是、年によりて多少あり、少キ時は雉子の足に豆腐をさし、塩を付、焼ていたゝかすより、雉子焼の名ありといへり

○東雅云、餅をカチンといふは、^{搗飯}カチヒ也古語には、物を搗をカツともカチとも云搗栗呼てカチクリと云又春米を米をカツなといふと云々、或説云、^{天野氏草尻}応仁、文明、已後、朝廷衰微にあはせ給ひ、廷臣他州に客食し殿宇荒蕪せし時官女なと食さへとほしかりし程に、町家より餅を調して日／＼売ありく者、禁門にも入ける其男常に^{カチン}褐を衣とせるか官女のそれともいはて彼男来れはかちんめせと呼初しより、餅をかちんとはいひけると南、是は高貴の人の御説とて、聞伝へしと云々

今按に此説おもしろしといへとも信用しかたし其故は前にいへることく海士藻芥に内裏仙洞には一切の食物に異名を付て召るゝ也飯をは供御餅をばかちんと云々海士藻芥は恵命院内大臣殿の筆記にて奥書に応永廿七年——しかれは応仁文明の頃よりは百年に近き古書なり、其時既にかくいへるにて或説の非なる事しられたり暫東雅の説に従へし能因雨乞の歌^{カチン}質の説は又俗説成へし(頭書、再考著ニ褐染衣、売餅者説出ニ拾言記、然とも応仁文明の頃といはず)

○東雅云未醬をムシといふは鶴林類事に醬^{カチン}曰ニ蜜祖云々ムシとはミソの転語なり云々ミとムソとシ通

○民間の俗米を呼て菩薩と云此語はもと韓地の方言に出し也鶴林類事に彼方言に白米を漢菩薩といひ粟を田菩薩といふとしるせり又俗間に糠^{カチン}未醬といふものは糠と塩とを和して作れるを名付てサ、ヂンといふ是は仏經を書写するに菩薩の字

の文を省てササとしるす有されはササとは菩薩の義也ヂンとは塵と云字の音を以てよふ也是も又米を菩薩といふ事によれる也云々 東雅

○酒家に酒林しとて杉をしるしとする事は土佐國風土記に大三輪大神のため酒を醸するに三輪川の水を用ひ造りそめし故河の名によりて酒を三わといふと云々 今按此事出万葉仙覚抄 されは今酒家に杉の葉をしるしとするも此大三輪の神の事による成へし

(頭書、万四 味酒乎三輪之祝我忌杉手触之罪敷君二遇難寸)

○酒造家にさけつくる事を知る者をトウシといふは刀自也昔造酒司に大刀自小刀自次刀自とて三ツの酒造る壺ありけり其大刀自は酒三十石計入し物なり後に酒造る人をも刀自といひしはふるくよりいひつぎし言葉なり彼造酒司の刀自は三条院の御時大風に彼司たふれ其時打わりてけりとふるき物にしるし置けり 今按此事続古事談第二卷ニ見エタリ 是等の事を世には異國の事に附会していふ説ありと聞ゆと云々

○通雅によるに糰餅クワンデツ拾頭ヒョウ饅餹クワシ等のことときかしこにては詳ならざりしと見えたり我國にはなほ今も是等の物の遺制あるなり我むかし御厨子所より公にまゐらせし物ともを見る事を得たりきそれか中俗間にも其制の残れるもあり因喜は俗にダ

ンゴといふ物の形のごとくにて饅といふ物をつゝめる也麴イイ麴は俗にヘソといふ物の形これ也 今田舎人ダンゴヘソナドイヘリ又イタ、キトモ云物敷

饅餹はもとこれ鳩といふ虫の形のこくなるをいふ俗にサ、モチといふ物の中に其形あるもの有也饅饅はヒラ也俗に花辨

といふ物に似たり 花ビラハ今俗ニ云ハナボロ敷通音也 是等の事としるし置はわづらはしけれとも異朝には既に其名もさたかならぬものゝ我

朝には猶ありしまゝに其制の残ぬるいとめづらかに覚えし故也云々 已上三箇点 東雅

○俚語に妻ををんななどといふもふるくいへる事なり大鏡七に此よつときかをんななどもゝかゝる事をつたへ聞てと云々

○俗にヒケラカスといふ詞は古語にはフケラカスといひし也 通音ヒフ 続世継物語上 藤浪 に云としつな俊綱かふしみふけらかすには

かに行て見んと云々

○雨中なとにありく時衣服に泥のかゝりたるをハネがあがるといふ万葉集第十四信濃歌にゝしなの路はいまのはりみちか

りはねにとよめるハネは黄土^{ハニ}なり二四相通にてハニをハネとはいへり和名鈔云土黄^{ニシテ}而細密^{ナルヲ}曰^レ埴^ト波^ニ過^ニ云々万葉集には黄土^{ハニ}とも赤土^{ハニ}とも書りはりみちとは土を置いてあらたに作りたる道をいふ

○俗にはねぎるといふ詞は鳥の羽たゞきふるふ形よりいへる詞なるへし万葉集第九^ニさきたまのをさきの池にかもそはねきるおのか身にふりおける霜をはらふとにあらし旋頭歌也此あらしはあり也
ラジの反り也有斯と書り此鴨そはねぎるといへるも羽をふるふなり

○俗に帯短^{ニヤ}し手細長^{ミヤ}しといへるも内宮六月十七日神事鳥名子歌云阿古女^{アコメノ}乃^ノ皆^{ソツテ}天^テ也^ヤ不^フ礼^レ天波牟倍里^{ハンベリ}、於比仁也^{オビニヤ}世牟^{セン}、多須^{タス}支仁也^{キニヤセン}世牟^{セン}、云々是等の遺転なるへし

○俗板齒^{イタハ}にて物を食ふをツムといふは其時必口を嚙^{ツマ}て食ふ故嚙^{ツマ}の中略にてツムといふ歟催馬楽老鼠ににし寺のおいねすみ、おんもつんつ、けさつんつ、云々略此つんつはツミツ也食ふをツムとは古くもいひけり又定頼卿集に鼠のすゝをはらひけるに^{ヨメノコハ鼠ナリ}ツムといふのはちすの玉をくひつるはつみうしなはんとや思ふらんとよまれしも罪をツムにかけられたり

○俗風のつてに聞たなどいふ詞も、清輔朝臣集に

へたか宿の花橋にふれつらむけしきことなる風のつて哉（頭書、飛聞雄略紀）

○田なと刈へき時節を刈しほといふも同集に

へかりしほのそともの麦も朽ぬへし干へきひまも見えぬ五月雨

○俗に、其かひがある、かひがなひ、などいふ、カヒは代^リの意也万葉集にへ味飯^{ミイ}を、水にかみなし、吾待し、代者^{カヒヘカシナシ}曾無、と書り代は、カハリとよみ、かへとはたらき、へヒ通してカヒといふなり、甲斐と書は借^リ字

○俗に云、雷は、和名鈔云、雷公一名、雷師、和名伊加豆知一云奈流加美云々是神にして鳴^レば、ナル神といふ也、古歌にも、なる神とこそよみたれ、されば神なりとは、神が鳴^リと、語を切て心得へきを、神鳴りとよひつゞけて、其物の名のやうに唱へ誤りたるなり、拾遺集に、神いたく鳴り侍りけるあしたに宣耀殿の女御のもとにつかはしける

天曆御製

「君をのみおもひやりつゝ神よりも心の空になりし宵かな
是等見るへし但しかみなりとは万葉集十四上野歌に

伊香保嶺ナリ
「いかほねにかみなりそねわかへにはゆゑはなけともこらによりてそ

是も神な鳴りそといふにて前にいへると同義なれどかみなりそねとつゝきたれば是等より転し神なりと唱來れる歟但し十訓抄ニ延喜八年八月廿六日かみなり鳴おそろしかりける時そ云々しかれば神なりと其ものゝ名のやうにいへるも近俗にはあらず

○俗にツ、ハタチといふは梅園氏云ツ、文通十九日本紀一ツ二ツ五ツと積而至ニ十故にツムなるを同韻通してツ、と訓する成

へし俗にツ、ハタチといふは十廿也云々ハタチは万葉集七に干各にはも人はいふとも織次我二十物の白麻衣是二十と書り○藤にてあみたる器をつぐらといふは、蔓にて作りたる物故、つぐらと直に名付たる也、つぐらとは蔓の古語なり青つゝらなと歌によめり、万葉集にかみつけのあそ山つゝら野をひろみはひにしものをとよめり、葛ノ字の注に藤可レ作布とあれは、藤は蔓也、藤も又つゝらとよむへし

○世俗米錢など入るゝ物をカマスといふ日本紀ニ襲ノ字をカマスとよめり是にや

○万葉集第十機ものゝふみ木もていてとよめるを見れば當時上機ツといふ物古制成へし又同集七にへをとめらか織機のうへを真櫛マツもて搔上カ、ツたくしきとよめるは今布を巻時松葉などをつかねてさいがきとやらんいふ事をするにやあらん

○今旅行の調度に矢立ツとて一種の硯有是はもと箴の矢を立ニる所に小硯をしこみ置て軍中の用意とせしより出し名也平家物語に覚明えひらのほうだてよりホウダテハ針立ニテ矢原ヲ立ニ一本に覚明はえひらの中より矢立とり出し云々太平記に四檀妙玄鑑の引合より矢立硯取出しともいへり矢立とはかりいふは硯を略せし成へし但し今の矢立といふ物古制なるやいなやいまたしらす源氏みをつくしの巻に今はたおなし難波なると御心にもあらてうちすし給へるを御車のもとちかき惟光うけ給りやしつらんさるめしもやとれいにならひてふところになうけたるつかみしかき筆など御車とゝむる所

にて奉れり云々是も矢立の類歟散木集に云物申ける人の常にあやしき事ありければ恨るを聞てくせくしきなんとなくな
きと申ければまゝきのやたてのひらなるに結び付てつかはしける

まろならぬやたての竹もふしことにくせくしくて世をは過けり

是今いふやたての義歟可考

同集隱題にもまゝきのやたてと有和名鈔射芸類細射万々岐由美とあり細射矢立歟

○苦をふきて結び付るひもを苦手といふも古語也万葉集十に秋田荊苦手揺奈利白露者——

○古代は衣莖といふ物有て人に衣服なと遣す時直に其箱のふたにのせて持出し也しかるを当代は広蓋とて蓋ばかりを拵る
事になりぬ今も狭箱の蓋に時服をのせる事有却而故笑に似たりといへり今按に平家物語第三御産巻に云御衣四十領銀劍七
ツ広蓋にのせと云々広蓋とふるく見えたり

○世俗に物の尺をはかるに両手を舒て尋取といひそれを一尋トビロといふ契沖師云曇鸞往生論註曰里舍間人不簡縦横長短咸
謂テニ横舒テ両手臂ヲ爲レ尋云々

○糞器をヲカハといひ又マルと云ヲカハは小廁ヲカハヤの略歟マルは日本紀私記ニ小便ヲマル大マ便マと訓す宇治拾遺には多どをま
るといひ和名鈔には蜚クシム蜚シム一云マロムシともいへり是等の古語より此器の名と成なるへし又便通をコクといふも古語也和名
鈔ニ糞ニ乱ニをシリヨリクチヨリコクヤマヒといへり又古語にははこするともいへり今物語に云信実朝臣作ある説経しの請用せられ
てことにめてたくたふとく説法せんとしけるにはこのしたかりければこいそかしくなりて、よろづいそぎて、ふせもと
とらずかへりて、物ぬぎちらして、いそぎゆきたりけるに、へばかりひりて、又物もなかりけり、かゝるへしと知りたら
ば、高座のうへにても、しばしこらへて、説経をもすべかりけるものを、とくやくしく思ひてけるほどに、其次の日又人に
よばれて、説経しける程に、又はこのしたかりけるを、すかしてんと思ひて、少あなほるやうにしけるに、まことのもの、
おほく出にけり、此僧すべきかたなくて、きのふは、はこにすかされて、へをつかまつり、けふはへにすかされて、はこ

をつかまつるといひて、走おりてにげ出にければ、うへのはかまより、たりおちて、堂のうちきたなくなりけり、聴聞の人鼻をおさへてけうさめてけり、いとをかしかりけりと云々

此はこするといふ古語も猶田舎には残りて丹波の人のしかいへるを聞り一休和尚の歌とて世にいひ伝るにも

「世の中は食ふてはこして寝ておきてさて其後は死る也けり

宗鑑犬筑波に霞の衣裾はぬれけり、といふ句に佐保姫は春たちなからはこをしてとあり其頃まであまねくいへるなるへし

○宇治拾遺第五に云無下に候し時も、御あとにふさせおはしまして、夜中暁、大つばまのらせなどし候しと云々此大つばといへるは、今所謂シビンなり和名鈔云褻器、周礼注云褻器謂清器虎子属也今按俗語虎子増鏡第八にも御虎子めしよせて御らんせらる紙をひたして見せらるゝにいみしうこく出たる黄皮の色なり云々或人云シヒンは私瓶と書へし左伝云褻公

十五年師慧過宋朝將私焉註小便也云々私とは小便の事也しかれば小児に小便さするをしといふも私々と書へしと云々(頭書、字彙云虎子洩器也西京雜記云李広射獵冥山之北見伏虎射之以其頭為洩器今鑄銅象之云々清器といふは至穢の所は宜潔清意にて却て清器といふ)

○日本靈異記曰聖武天皇御世紀伊国伊都郡桑原之狹屋寺尼等發願於彼寺修佛法事請奈良右京藥師寺僧顯惠禪師奉作三十一面觀音悔過時彼里有凶人姓名忌寸也字田上天門邪見不信心三寶忌寸之妻有上毛野公大椅之女一日一夜受八斎戒恭行悔過居於衆中夫從外歸家而見無妻問家人答曰恭行悔過聞之瞋怒則行喚妻導師宜教化不信受曰汝婦吾妻頭可取罰破斯下法師々々矣惡口多言喚妻婦家則犯其妻卒爾聞着蟻嚼痛死云々靈異記ハ藥師寺僧景戒作といへり景戒は孝謙帝の時の人と云々源順云俗以閑字為男陰以閑字為女陰其說未詳云々しかれば此二字を用ひ来る事尤久し旧本今昔物語卷廿三蕪菁座人之子語に閑の字を女陰に用たり古事談卷二云頼光朝臣遣四天王等令打清監之時少納言同宿ニテアリケルガ依レ似ニ法師欲殺之間為尼之由ヲ云ハントテ忽出開云々は又閑ノ字を用たり此少納言ト云ル清少納言歟可考マラの

訓マは前之義ラは助語乎又ヘノコは閑はヘノ仮名にかり用る字なれば和語閑子なるヘし和名鈔陰核俗云篇乃古とあれは共に古語なり

○宇治拾遺第一源大納言雅俊一生不犯の僧に仏事の鐘うたせたる所に云此僧わなゝきたる声にてかはつるみはいかゞ候へきといひたるに諸人おとがひをはなちてわらひたると云々此かはつるみといへるは自淫也今俗ニ云センズリ太秦牛祭祭文にも鐘樓法華堂乃加波津留美と云々此祭文相伝云云 伝教大師作云々一書云昆奈律曰鴈陀夷欲意現在前時執ニ生支ニ泄ニ精されは男根をシゞといふも此生支の語転してシゞとなる歟といへり

○盗人をとらへて見れば我子なりといへる俗諺は宗鑑か句なり犬筑波にあり

○鄙俗の詞に物をひそかに取置をシコタメルといひ又シコナメルともいふは垂仁紀に匿ナカノ字をシナメルと訓す是物をかくす古語也此語の転したる歟

○又物に長するをシコルといふはしきりにと云に同しキとコと同音なり而此シコルと云詞近俗ならず万葉集第十二ニ我せこか来んとかたりし夜は過ぬしへやさら／＼しこり来めやもとあり此しこりといへる今俗にいふ所とおなししへやはよしや也来んと契りし夜も過ぬればよしや今さらしこりては来しといへるなり

○俗にうたてといふ詞古事記安康天皇段云夜既曙訖可ニ幸獵庭ニ乃進メテ馬出行爾侍ニ其大長谷王之御所ニ人等白字多底ヲ物云王子ヲ以音ヲ云々うたての詞始めてこゝに見ゆ

○物こと暗記たるを俗うかめてあるといふも近俗ならず讃岐典侍日記にあげくれ一二の巻をうかめさせ給ふと云々法花経也

○自己をおれといふも無下にいやしき詞にはあらず同日記に御前のおはしましていさ／＼黒戸のみちをおれが知らぬにおしへよと仰られてと云々後鳥羽院ヲサナクオヘシメシケル時ノ事也

○俗に空の曇をしけるといふ日本紀天陰ヒシメとあり

○俗に物を穢をヨゴスといふも古語なりいにしへは人を譏するをヨゴスといへり応神紀云廢ヲ兄譏ヲ言ニ天皇ニ云々又催馬楽

葦垣に誰か此事をおやにまうしよこしけらし云々又万葉集十二

人言^{ヒトコトノ}之譏^{ゴミダシ}乎ききて玉鉾の道にもあはすといへるわきも子

是を見れば譏者は清き人をもいひ穢す故それをよごすといへるより万の物のけがるゝをよごすとはいふ歟

○俚諺に目さまし草なといへるも雅語也万葉集十二

へあかつきの目さまし草とこれをたに見つゝいましてわれをしのはせ

とよめり色葉集には笑草ともよめり此草トハ目さます種^{タネ}笑ひの種などいふ意也

○終夜不^レ眠を夜あかしといふも俗ならず万葉集十五

へぬは玉の夜あかし船はこきゆかな三津の浜松まちこひぬらん

○午王の事はは諸国神社に宝とせらるゝ印璽有是を御正印とも又は璽璽ともいふ也^{伊勢八幡加茂鹿嶋等ノ社ニアルナリ}世に午王といふ物も此

製にならへるなり璽ノ字俗に玺に作る遂に転し訛^{アヤマリ}て玺ノ字をわかち午王となる成へし其中熊野の午王といへる物鳥の形を以点画とせられしは鳥篆也しかるを彼神の使鳥なりといへは鳥篆といふ事を知らずしてからすなりといひ誤を伝へしなるへし又此鳥篆の印璽を見て鳥を彼神の使とおもへるにやあらむ

○証文を手形といふ事古の文書に手印といふ事あり^{手印ノコト東鑑ニ見ユ}手印といふ事は我朝にのみ称するにあらず異朝にも有周礼

質劑の注に質劑とは今の下手の書のことしといひ疏には漢の時の下手の書は則今の画指券也俗に云手印の事也といへり又我朝の戸令を按^{コノ上欄ニ張紙アリ曰}書を解せるものは指を印とせよといふ事あり是則漢の時の下手の書唐の代の印

の事なり書を解するものは自書すれば疑事なし書を知らざる者は其指を印して其文^{ズナ}を以信とす是を手印といふ也諺に手形といふ即これなり又印ノ字オシテと読^ムもかゝる故成へし凡印章を用る式尋常^{サツツキ}には朱色を用凶事には藍色を用る事にやおもふに戦争の時朱色を求るにいとまなき時墨色を用られし事も有へしされはいにしへより手印といふものありしにより彼朱色なるものを御朱印と誤り墨色なるものを御墨印ともいへる成へし

○飯をめしといふは人のくふを尊ひてめしといふへき也自喰ふをいふへからすめしはめし物也委いへはきこしめしの義なり
今按に万葉第八わけかため我手もすまに春の野にぬけるつ
りはなぞめて肥ませ又十六にむなきとりめせともよめり

○僧に和訓なし又尼をアマと呼ぶも和訓にあらず阿摩は老女の梵語なり比丘尼の事にあらず

○金剛草履といふは菅を以て作る伝云五大院安然和尚いたく貧しかりければ草履を織ていとなみとせられけるに人來りて
それはいかにととへば金剛の性鉢と答られしとかや今も菅の草履を金剛草履とはいへり金剛坂の地名もこれより起るといふ

○京師の淫房ははしめ所を定し事なく市井に居れり応仁文明の乱後世のさわかしきにかゝるたはれたる遊びもなくやあり
けむ天正十七年の頃万里小路二条辺は人まれ／＼にして古柳左右に生ひつゝきたれば俗に柳の馬場と呼し其時原三郎右衛門秀正と云者住せしに秀吉公かれに命して所の賑／＼しかるへきやうにはからはしむ秀正林又市郎等某といふ者と心をあ
はせ万里小路二条押小路三町に町を立遊女を置て柳の町と称せし娼房を慶長七年に室町六条に移さる東は室町を限り西は
新町北は五条の橋通に至る世に是を三筋町といふ
今ノ雪駄町ヨリ魚棚
マデノ間其跡ナリ
元和四年に遊女の舞をよく舞ふものを院にめされし時
丹波大掾藤原吉政といふ号をかりに下され男の舞太夫に准せさせ給ひしより其一家に名ある女を太夫と呼侍しとかや寛
永十八年に今の朱雀七条にうつす此廊只一箇の門のみにして他の道なし肥前国嶋原の城廊に似たれば俗島原といふ本の名
は西新屋敷といふといへり
己上六箇点
天野信景説

○宇治拾遺第二云げすどもきたながりて其小路を藁の小路と名付たりけるを帝聞せ給ひて其四条の南をは何といふぞと
はせ給ひければ藁の小路となん申と申ければさらは是を錦の小路といへかし余りきたなき名かなと仰られけるより錦の小
路とはいひける云々今按に大内裏古図に天喜二年号錦小路と云々しかれば彼帝は後冷泉院なるへし

○男女の中を妨るをセクといふは避といふへきをサとセと通すればセクと転語せる成へし万葉集十四

へかみつけれのゝ舟橋とりはなしおやはさくれとわはさかれかへ
難避 吾難

飛鳥川せくとしりせばあまた夜も寝てこましをせくとしりせは

是は逢せしとさくるを河水を塞によせてせくとはよめり是等合考しるへし

○指を折て物をかそふるを手を折てかそへるといふはことたがひたるやうなれと万葉集第八に指折可伎数者と書り伊せ物かたりにも手を折てあひ見しことをかそふれは

○俚語に物の間にあはぬをてんこつにあはぬといふは無^キ天骨^{ハコ}なり其業^{ウサ}に自然と得たる所なきをいふ也宇治拾遺第一に云さきの翁よりはてんこつもなくおろくかなてたうければ云々

○人の呼ふいらへにエ、といひエイといふも古語なり同書空寝入したる児の段云むごの後えいといらへければといへり

○俗に見る空がせぬなどいふことはも二条院讃岐集

へおしみつる春のかきりと思ふには残れる花も見る空そなき

○俗に無^キ実事をいひしらふをたはこといふといへるは証言^{グハコト}なり天智紀云禁^{イハヒヤム}断証言^{グハコト}妄妖偽^{オホシレコトヲ}云々

○俗語にひたとゝいひ或はひつたりといふは常の字なるへし常ノ字ひたとよむは常陸^{ヒタチ}の例に知るへし

○又いつくをさして行といふさしては射也万葉集に自肥前国美弥良久埵^{ミナモトノササキ}発^{ハツ}船直射^{フナナサレテ}对馬^{タマ}渡^{ワタ}海とも從^{フナガサシテサシテ}香嶋津^{カサマツ}発^{ハツ}船行射^{フナナサレテサシテ}に熊来村^{クマキムラ}往とも見えたり

○をさな子を夜分なとつれありくとて額に犬といふ字を書事一書云大府記云^{為房卿}康和五年八月廿七日東宮迁^{ヒト}御高松第一戌四刻御出宗通卿御額書^ニ大字^ヲ云々康和は堀川院の御宇なれば尤古例しなり筑波集にへ犬こそ人のまもりなりけれと云句に

へみとり子のひたひに書る文字を見よ 良阿法師

○里童の語に犬をけしかくるといふも同集に

我心なたねはかりに成にけり といふ句に

人くひ犬をけしといはれて 西音法師

(頭書、ケレダル字成へし字注^ユ方言云秦普翼ユ隨^テ謂^ラ使^テ犬曰^ク嘸云々)

○人の子をあれはま子じやなどいふ俗語は、真実よき子なりといふ義にて、いにしへもしかいへり、万葉集第廿に

へおほ君のみことかしこみうつくしきまこが手はなれ嶋つたひ行慈愛 真子

○文なと封して墨を引たるを、俗にシメといふは、絨なり此絨^{カン}ノ字万葉集第四にシメとよめり赤駒^{アカコモノ}之越馬^{コユルマ}柵^{サリ}乃絨結^{レモユビレ}師云々
されはシメといふも故あり

○俗にみづからの事を、わしといふも古語也、万葉集十六に浮出流^{ウチナリ}夜登^{ヤト}將見^{ハクミ}和之とよめるを、注に、わしは汝なりとあれは、我といふが、自他にわたりていふことく、自己の事をも通してわしといふ成へし

○汗の出るをあせかくといふも古語也同集第九に衣手の常陸の国のふたなみの筑波の山を見まくほり君の来ますとあつけきに汗かきなけき云々

○門^{カド}さすを、門たてるといふも古語なり、万葉集十二

へ門たてゝ戸も閉^トたるをいつくゆか妹か入来て夢にし見えつる何処從

○よそといふ詞を余所と書て自然の音通を和語に用ひたりとおもへるは非かこと成へし同集第三に外爾^{ウツニ}見^ミ而思^シ香云々 此外ノ字和語によそといへる正字なるへし

○今俗語に誰がたによい、誰がたにあしいなどいふ、此タニといふ詞は、為^{タメ}に也、是古語の遺風なり、万葉五
龍馬たつのまをあれはもとめんあをによしならの都に來^キん人^{ヒト}のたに

是見つへし

○父をテ、といふも、海人刈藻物語に云、若君てゝと尋給ふと云々又てゝはととひ給へは、大将にむかひ、たかやかにわらひ給ふといへり、テ、は父の転語チとテと二四通ト、と云も同音通

○俗に男女ふかく契り、心を合せたるを、くさりあふて居るといふは、和名鈔^ニ鐔^ニ音梅和名久佐利 此義なるへし

○雨がしよぼく降といふ俗語も、古語の転遺なり、万葉集十六青雲のたなひく日すら霖そぼふるとよみ、古今集に、雨そぼふりける日よみて遣しけるといへり、此そぼ降即しよぼふるとおなしシヨの反ソなり

○今舟に何丸など名を付る事も古きためしなり応神紀に枯野と名付給へる舟あり続日本紀に高麗へつかはさるゝ使の乗れる舟を能登と名付し事あり是等の例による成へし万葉集十一

「あちかまの塩津をさしてこく船の名はいひてしをあはさらめやもとよめりいにしへより舟に名有事しるへし

○権は崇峻天皇の御宇始て呉国よりたてまつる敷姓氏録云上野同氏多奇波世君之後三世孫久比泊瀬部天皇諡崇峻御世被遣呉国雜宝物等献天皇其中有呉権天皇勅此物也久比奏曰呉国以懸定万物令為交易其名云波加理云々

○今鄙俗のことはに物を見とめ置事をつないで置といふも古遺なり斉明紀云四年五月——伊喻之々乎都那遇何播杯能倭柯矩婆能云々云々獵人の鹿なと射あてゝ矢疵より流し血の跡をしたひ行を跡をつなぐといふとぞ、此紀の歌もしか聞ゆる敷俗語是等にしるへし

○犬猫などのそばへるといふは、くるひたはふるゝをいふやうなれど、たゞそばへより遊ぶといふ義成へし、かしこに降雨の、こゝにも、少降を、そばへが来るといふは、雨気の近よるをいふにもしるへし万葉集十三にはいそびひをるよ、いかるがとしめと、鳥のうへにもよめり

○俗にやさしき人といふは風流なる人をいふとのみおもへるは古語の遺にたかへり古語にやさしきといへるははづかしきなり、万葉集に「玉嶋の此川上に家はあれと君をやさしみあらはさずありき、竹取物語にあまたの人のこゝろさしおろかならぬを、むなしくなして、きのふけふみかとのたまはん事につかん、人ぎゝやさしといへは云々是等皆はつかしき也、今俗に心ある人をやさしきといふも心はつかしなといふかことし

○伊勢斎宮の時みやつことも、えんざ敷、うちなみてちいさき斎に小石を入れ、おしら石くとかしかましくよばゝるに、

あしをとらずれば、其石を広前に打まく、おもふにこれ、清浄散米の意歟、筑波集に
しらけの米はたゝ人のため　といふ句に

神垣の庭のまさごをうちまきて

と救済法師付られたり無下に近俗のわさにはあらずかし

○俗にほとゝきすをねなから聞ぬものなりといひ伝へしは万葉集十九に

ゝ常人もおきつゝそ聞郭公此あかつきに来鳴はつこゑ

又小大君集に云つゝみの大宮に、ものきこえけるに、四月に、ほとゝきすの声を、ふたりながら聞けるほとに、おろかに
なり給ひければ、きこへにけり

ゝ初声をふしてや聞し時鳥きくにたかはぬ心地こそすれ

是等の遺語なるへし

○五月を嫁娶に忌はいにしへの事也うつほ物語祭使巻にされはいかゝはすへきさみたれにもなりにけるを

ゝためしにも人のひくへきほとゝきす此さみたれをいますもあら南

又藤原君巻に人のいむといふさ月はいぬ今はかの事なし給へと云々 信明集に

ゝ神代よりいむといふなる五月雨のこなたに人を見るよしもかな

伊勢集に

聞声をなかくとおもはゝ時鳥いむさ月をはすくしやはせぬ

檜垣集に

人のいむ此月なみをたてゝこそおもはすならん事もうらみめ

源氏螢の巻に五月雨になりぬるうれへをといへり花鳥余情云盛明親王集に

「説つゝも頼む月日はあるものを五月雨にさへ成にけるかな

海士のかる藻物語にさ月はいむ月なりとの給ふと云々 是は中宮御懷妊にて内裏を出給ふをいへり此月何事をも忌にや異苑曰俗以五月爲惡月云々しかるを今の俗五月はいはひ月とて嫁娶にも忌む事なく二三月四月六七月八月なんとを忌事になりぬ

○世俗に人にそしらるゝものは噓ウサするといひ徒然草にもくさめするはわろき事のよしにいへり拾芥抄には噓ウサ呪文を出せりしかるを万葉集十一には「まゆねかきはなひ紐とき待ちむやいつしか見んとおもふ我君とよみて人におもはるゝ時は噓ウサよしにいへり其義大にことなり毛詩毛詩 寤言ウコノミ不レ寢願言ウレオモフ則ニハナヒル噓ウサ注云我甚憂悼而不レ能レ寢汝思コト我心如是我則噓ウサ云々万葉によめる此意にかなふ歟

○俗に風の便りといふは広韻云風者天地之使也云々

○卑俗の語に子なとうしなひしをいなせしといふはわきていやしく聞ゆれとも万葉集五には我子とばしつ世の中の道とさへよめり

○心にかなふ事をおもはしきといふは遊仙窟に可愛をおもはしきとよめり

○ふつに知らぬふつと覚えぬなといふ俗語は日本紀都ツニ悉是等の字をよめり

○身をきよむる時塩水を用る事は伊弉諾尊小戸橋之檣原にて祓除し給ひしより潔身に潮を用事を専要とす万葉集四「君によりことのしけきを龍田こえ三津の浜辺にみそきしに行とよめり是等にて潮を要とする事見つへしされは今潮なき時は水に塩を入て用るなり

○今俗野徑に繩手と称するものを古へは長手といひけり万葉集五常しらぬ道の長手をくれ／＼どゝよめり是長手といへと繩手の心ありくれ／＼どとは来れ／＼どなれとも繩はくる物なれば繩手といふ心にかけてくれ／＼どとはいへり第十五に君の行道の長手をくりたゝねともよめりくりたゝねはくりよせたゝみよせ也是又繩の意なる事明らか也以レ繩ヲ里程をはか

る事あれば繩手ともいふなるへし

○今俗に旅行などせし人の留守に影の膳とて居る事あり是も古風の遺意成へし万葉集十六

荒雄アラヲらハノヲを来んか来しかと飯イもりて門に出たち待てと来まさず
是其義なるへし

○又もてはやすなどいふ詞此はやすとは生ノ字の意歟同集十一穗蓼フミハヤシふるから採生ツミと書後撰集に「なになにに菊色そめかへし句
ふらん花もてはやす人もなき世に」
古碎

○俗にわやく者といふは契沖師云明恵伝記下云打向ふまゝに賞罰行ひ給はゞ弥人の心好わゝくにのみなりてと云々わやく
は此わゝくの転語成へし万葉集五布かた衣のみるのことくわゝけさかれるとよめるも同意にてみたるゝ心なり々々

○人を替そやすといふそやすとはほこらすなり万葉集十六こまにしき紐にぬひつけさしへ重ねへなみかさね着てうちそや
し云々契沖師云此うちそやしはひけらかしほこる心なり拾遺集にそやし豆と有も豆を炒イリて塩水などにひたせはほとび大
になるをいふそやし豆も自ツほこる歟云々此俚諺の証に万葉集を引用ひし所おほくは契沖師説なりこちたければことごとくに
はいはすと知るへし